

研究結果

本研究は戦時体制下の日本文学状況を実証的に究明するために行われたものである。

本研究は第一に、理論的に非常期・準戦時体制・戦時体制について論究し、その主たるイデオロギーである軍国主義とこの時期の日本文学の置かれた状況について考察した。第二に、柳条湖事件（1931年9月18日）後のプロレタリア文学を含めた日本文学状況について考察した。第三に、廬溝橋事件（1937年7月7日）後の日本文学状況の考察である。戦時体制と日本文学との関係、戦争爆発後すぐ執筆された榊山潤の『戦場』と林房雄の『上海戦線』及び緒戦の文学者たちの活躍ぶりを考察した。それから、石川達三の、災いを招いた『生きている兵隊』と火野葦平の、爆発的人気を博した『麦と兵隊』についてその禍福となる原因を考察した。新聞を含めた諸史料が証言しているように、戦時体制下の文学者がごく少数の者を除いて、その圧倒的多数が戦争賛美、侵略美化などの戦争協力行為があった。それは文壇の大御所たる菊池寛の場合でもバスに乗り遅れるなど「ペン部隊」の積極的参加者でも韻文分野で大いに協力活動する俳人・歌人・詩人でも同じことである。

第四に、真珠湾攻撃（1941年12月8日）による日米開戦後の日本文学状況の考察である。それは「文壇の解消」という一つの言葉で呼べるだろう。他の文学団体の存在を許さぬ日本文学報国会の結成、日本の絶対的主導による三回にわたっての大東亜文学者大会の開催、人の子・人の夫に決戦、玉砕、特攻と、躍起となって喚き立てる文学者など、戦況の悪化につれて必勝と信じてきた文学者が精神的に絶望となり、文学は文学ならぬ状況になっていく。

第五に、敗戦後は日本ではなくてアメリカの主導によって戦争協力の文学者の戦争責任は追及される。文学者の戦争責任に対して、文学者はどのように受け止めたのか、また、文学者の戦後責任とは何かについてもその作品と言論を通じて簡単ではあるが、考察した。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表（題名・発表者名・会議名・日時・場所等）：

論文（題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等）：

書籍（題名・著者名・出版社・発行時期等）：

『昭和史の証言—戦時体制下の日本文学（1931～1945）』、胡連成、北京大学出版社、2009年（予定）